

「ほう、できましたか。」

和尚さんは、与次右衛門のはればれとした顔を見るなり、いっしょになって顔をほころばせました。

「やつと、重荷をおろした気持ちです。」

与次右衛門と和尚さんは、お寺のえんがわにならんで、苦労ばなしを語りあいました。二人の前には、冬枯れの幕内の畑がひろがっていました。

元禄二年（一六八九年）七月六日、会津藩は、『会津農書』を書いた与次右衛門をほめたたえて、表彰状とごほうびの米三俵をあたえました。

幕内の人々は、それを自分のことのように、よろこびあいました。

「与次右衛門さんは、たいしたものだ。殿様から二度も賞をもらった。」

「百姓のことは、何を聞いても、わからないことはないものな。」

「百姓のことだけではないぞ、何でも知らないことはない。生き字引きだ。」